25

特246
962

大政翼賛運動の方向

田忠正著

②

0004857000

0004857-000

特２４６－９６２

大政翼賛運動の方向

山田忠正・著

皇民団本部

昭和１５

ABC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

特246
962

目次

(一) 建設信條の一貫性……(1)
(二) 公益優先の是正……(4)
(三) 一體主義の公認要望……(7)
(四) 全體主義との相違點……(9)
(五) 林大將の蹶起要望……(12)
(六) 秋霜なる滅私力……(15)

帝國図書館

大政翼贊運動の方向

山田忠正

（一）建設信條の一貫性

新體制運動は、其形態愈々成り、大政翼贊の大旗幟の下に、維新段階への巨歩的な發足を見るに至つたことは誠に喜びに堪へない。

私は此處に皇民の一人として、この新運動を泰山鳴動に終ることなからしめたい念願をもつて、極めて卒直に苦言的聲援を送り、運動の根本性確立に一臂の力を添へたいと思ふ。

新體制運動の緊迫せる運動目標として、高度國防國家建設と外交轉換の問題があるが、今日までの運動經過、及び其他の角度から、第一に高度國防建設を考へて、

未だ深刻性の不足を感じさせる諸點が多いのを遺憾とする。言ふまでもなく日本の高度國防は、陸に於けるソ聯の大軍備と對峙し、海に於けるアメリカの大軍備に備ふべき日本及び亞細亞の死活問題である。假りに世界第一の陸軍國を誇るソ聯は、大戰前僅か四ヶ年に一千二百億ルーブルを支出して、海陸空軍備の高度計畫を敢行し、今や飛行機は一萬機を突破し、浦鹽の潛水艦は百隻を越へんとする最も完全な國防國家である。次に世界第一の海軍國を誇るアメリカは、一轉して大國防國家に移行するに至り、向ふ數ヶ年に四百億圓の大豫算をもつて世界大海軍國を二つ合せた位の戰艦三百萬噸、飛行機三萬五千機を計畫し、太西洋は英國主力艦隊に一任して其全海軍力を太平洋一面作戰に集中せんとする熱狂ぶりである。

國防の意義は、絶對に相手國に對する相對力でなければならぬ。即ち日本の高度國防は、どう考へても、數百億圓以上の大豫算を必須とする。そして恰も戰前のドイツが『バンよりも大砲を』と言ふ血みどろなモットーの下に、數年間に九百億マルクを支出して大軍備を完遂したと同樣な悲愴なる建設信條をもつて全國民生活を

國防一色に塗りつぶし、血によつて築き上ぐる決意を必要とするは言を俟たない。

日本が此大計畫を實行するには、先づ自由主義的な一切の過去を一擲してかからなければならない。日本の自由主義時代には、一億圓か二億圓の軍事費を議するのに、一ヶ月も二ヶ月も甲論乙駁して居た時代があつたが、そんなことでは現在の高度國防は絶對に期待し得ない。全國民は、死活に當面せる大國難を意識し、國家存亡の岸頭に立つて一切の利己を捨てて　天皇に歸一し奉ると言ふ、本然なる盡忠報國の姿に還らなければ絶對に出來ることではない。

ドイツ民族は、萬斛の涙を呑む民族的大復讐心を根本としてこそ『バンよりも大砲を』の信條も確立し得れば、又『戰時中利得すべからず』の峻嚴なる戰時經濟令にも服從することが出來た。そして其燃ゆるか如き愛國的情熱は、少しも生産を低下せしむることなく、益々擴充の一途を辿つた所以でもあつた。

日本は、ドイツのこの涙の經過に對して、これを心なしに見てはならない。日本の高度國防は矢張りドイツ民族と同じく、國民の一人一人が秋霜烈日なる和氣清麿

の心となり、盡忠報國の楠正成の心となるやうに、一切の利己をかなぐり捨てて天皇に歸一する絶對奉公の信念から出發しなければならないのである。

（二）公益優先の是正

然るに、大政翼贊運動に於ては、高度國防に直往する經濟建設の指導原理として『公益優先』を採用したが、果してこの觀念位を以て、空前にして且つ深刻なる高度國防を完遂し得るであらうか。

公益優先と言ふ以上、そこには私益主義に對する對立感も潜在して居るし、又資本主義に對する妥協感も含有して居る。この公益優先は、『道』を以て一切の『物』を支配すると言ふ、皇道經濟若くは翼贊經濟の一貫したる理念信條とは決して同一ではない。況んや、自由主義時代であつても、私益主義と國家目的との一致によつて有ゆる經濟產業の連營が行はれて來たのであつて、矢張り公益優先であつたと言ひ得る。斯くの如き曖昧な、そして自由主義に對する未練たつぷりな觀念を以て、

果してこの非常時局を乘り切ることが出來るであらうか。

要するに、公益優先と言ひ經濟倫理と言ふのも、流行型の所謂思想家たちが、ヂャーナリズム的に使つた一個の時代語であつたに過ぎない。しかも、この資本家に對する一種の妥協感すら含んで居る淺い時代語が、最も深刻な今後の國防經濟建設に對する指導原理として採用されても、これが果して此激流に掉さして押し切ることが出來るであらうか。或は假りに、自由主義時代と皇道經濟時代との間を橋渡しする梯子として公益優先を認むるにしても、この時代變化の激度高き奔流下に於ては、どうしても中間的役割たるの價値を發揮し得るとは考へられない。

皇道經濟の論は、此處數十年以來、國民各層から叫び續けられたのであつた。私共は特に、皇有皇產を原則とする公私一體の翼贊經濟制を絶叫して來たのであつた。卽ち、政治も、自治も、經濟も、產業も、悉く皆　陛下の神意御顯現に對する萬民の奉答翼贊なりとする理念に出發する經濟原理である。公益私益の並立對立でなく公私一體である。小利である私益は大利である公益の中に生きる。それは寧ろ

私益でなく其全體が公益である。有ゆる經濟人、產業人はこの公益の中に於て、翼賛度の深度に隨つて報酬を受くる觀念でなければならぬ。フランスの亡びた原因は、國民各個が利己主義の毒素を捨て得ざる處にあつた。血を以て築き上ぐる高度國防は小利を捨てゝ大利に合一し得ざる不徹底では絶對に期待し得ることではない。國家亡ぶる處に自己もなければ私益もあり得ない。今や全國民は歴史創つて以來の悲愴なる決意を以て、只眞しぐらに　陛下に歸一し奉ると言ふ一貫せる信條確立以外には何ものもないのである。

新體制運動は、大政翼賛體制を一大指標としたのは吾等の絶叫と方向を等しくし、正に其當を得て居た。然るに、其一大指標下に於て、理念の一貫せざる公益優先にこだはつて居れば、結局一種の理念の分裂、信條の貧困を來して、運動それ自體の弱性を爆露するに至るのである。即ち新體制運動は、有ゆる部門に卒直なる修正を加へ、最善の途に進まれんことを希求する。

（三）一體主義の公認要望

世界は、正にイデオロギーの戰場である。歐羅巴の全體主義、英米の民主主義、ソ聯の共產主義の三大主義が、各々國運を賭して死鬪を演ずるのが世界の現狀である。日本はこの世界三大主義の重壓下に皇道を旗幟として立ち、この國際的思想戰場に於て一歩たりとも後退を許されざる現實にある。

更に國內的には、新體制運動は、要するに國民信條の動員であり、一億一心の結集運動であつて、一定の建設目標の下に力强く引つけ、維新段階への直進に勇躍せんとしつゝある。

然し、今日までの日本の國民運動を顧みて、大きな缺點の一つは、何れの運動も皇道を根本とする點は同じであつても、其表現を異にし、記述を別にし、或は化石的な平凡語を並べ、或は極端な變質語を用ひ、遂に運動それ自體を自滅に陷らしむる如き傾向が多かつたことである。それがために、國內的にも國際的にも單一的な

大潮流を形成することに遺憾な點の多かつたのは、私共維新運動者の立場から誠に慚愧に耐へないことであつた。

故に私は、新體制運動に『一體主義』の公認を要望し、內閣及新體制準備委員に向つて進言を試みたのであつた。

勿論皇道は『道』そのものであつて、主義ではない。故に皇道主義とは唱へたくない。然し、維新事業若くは第三文明建設の世紀的運動は、最も尖鋭なる主義の戰である。隨つて、信條を動員し、人心を結集せんとする建設指標は極めて徹底した る武裝語を以てする武裝運動たるの意義を持たねばならぬ。そして、國內的にも國際的にも、政治的にも、經濟的にも、一貫したる理念、系統ある哲學が含蓄して居らねばならぬ。この意味に於て、有ゆる角度から檢討を加へた『一體主義』の公認を要望して已まないのである。

世間には、イデオロギーよりも實行が先だとの論がある。勿論それに相違ない。然し、其實行には、必ず一貫不動のイデオロギーが根本をなして居らねばならぬ。

大化革新も、明治維新も、ただしはヒトラー改革も、或はムッソリニ革新も、其强き實行力には必ず鋭きイデオロギーが根本をなして居たのである。即ちイデオロギー若くは主義を最も力强く揭げ、これを突き通すことによつてのみ大政翼贊運動の成功があるものと思はねばならぬ。

假に若し、新體制運動が尖鋭にして妥當なる主義を確立しないとすれば、それは必ず從來の如き各種の論議、若くは思ひ〳〵に唱へる原理の氾濫を來し、或はドイツ其儘の全體主義を唱へるものが增々多きを加へ、遂に新しい弊害すら發生するに至るべきことを私は恐れて居る。

次項の『全體主義との相違點』は、一體主義公認要望の進言書に添付せる參考書であつたものである。

（四） 全體主義との相違點

一、自然性と人間性。 一體主義は自然性である。『神ながらの道』が一體性である。

神と人とが合一するのが一體主義である。

全體主義は、力の原理の上に立ち、ヒトラーが一國家一指導者を叫んだやうに、支配者と國民とは權力に對する服從の關係にあるが、一體性は、上御一人との間が愛撫と歸一の關係にある。

故に、一體主義は生命そのものの顯現であるが、全體主義は人間の考へ出した哲學であつて、常に興亡盛衰が之に伴ひ、未だ完成原理とすることは出來ない。

二、生命性と數學性。 一體主義は生命性であるが、全體主義は部分の集合である。一體主義は、神と人とが有機的に合一する能動的な生命示顯であつて、其全性格が創造性であり、道德性であるが、全體主義は、數學的に人間的昂奮性の服從を合計したものに過ぎない。故に全體主義は未だ自由思想のやうに、人間と人間との間が民約說的に協力する機械論的觀念體たる範疇より脫することは出來ない。

況んや、一體主義は、唯物史觀を克服する理論體系としての生命史觀の領域を持つて居るが、全體主義は、共產主義及び自由主義と僅かに紙一重である。

三、立體性と局地的平面性。 一體主義は、過去、現在、未來を一貫する立體性である。卽ち一體主義は過現未一體の歷史性であり、永遠性であるが、全體主義は單なる平面的な部分の集合に止るものである。而も、その平面も全地表に及ぶ平面ではなく、人間力の及ぶ範圍の狹き局地的なものに過ぎない。今は、人間と人間との鬪爭史である現世界に對して、過現未一體の生命史觀哲學を敎ゆる時代であつて、この立體性のない哲學は、どう考へても優越を誇るわけには行かない。

四、歸一性と服從性。 一體主義は中心に對する歸一性であるが、全體主義は服從性である。上御一人に對する歸一觀であつてこそ、御統治に對しての奉答觀、翼贊觀が發祥して來る。政治も、自治も、產業も、經濟も、悉く皆臣民の奉答翼贊なりとの思想が燃え上つて來る。この思想こそが、日本の新體制を造り、大東亞をも造り上ぐる根本でなければならぬ。然るに、單なる服從性の生地のまゝの全體主義に吸ひ込まれたら、この重大な歸一觀に可なりな禍を及ぼすのである。歸一觀には、百錬の鐵もあれば忠勇義烈もあつて、男性的な迫力に乏しくはないかな

どと考へる如きは、恐るべき杞憂である。

五、普遍性と局地性。 一體主義は、恰も太陽が全地表を隅なく照す如き普遍性である。然し全體主義は、力の原理に基く局地性である。大小不平均の國家群を對照とする今後の國際關係は、大國が小國を相補し、小國が大國を相補しつゝ、相補性原理によつて相互一體的な平和體制を生み落す處に第三文明建設の指標がある。殊に東亞共同體は正に一體主義的道義性による相補體制の創建であつて、全體主義に身も心も打ち込む如きは驚く可き早計である。

（五） 林大將の蹶起要望

大政翼贊運動の生誕を促すに至つた其思想的背景は、勿論根深き歴史的な遠因もあるが、二十數年前からの第二維新論、日本主義思想、皇道維新論、昭和維新論等である。そしてこれを唱道した主流は、烈々たる義心に燃ゆる愛國陣營であつたことは何人も否定し得ないであらう。

而もこの、愛國陣營を主流とする維新論は、反社會主義思想、反既成政黨思想、反官僚獨善思想を內容とするものであることは餘りにも顯著である。故に大政翼贊運動が、眞實なる維新段階への巨歩的發足として革新の正道に進まんがためには、何處までも社會主義的でなく、既成政黨的でなく、官僚獨善的でなく、一切の自由主義的常識を一擲して直往しなければ、運動の生命たる維新性を喪失する結果を來すのである。然るに、大政翼贊體制の大旗幟下の新體制運動には、轉向社會主義者も居れば、既成政黨關係者も居り、又官僚群も相當に巾をきかせて居る。勿論、一億一體を企圖すする國民運動として已むなく辿るべき筋道かも知れないが、かゝる大きな惱みを包藏して居る以上、特に指導理念を何處までも一貫し、建設信條を飽まで明快に發揮する積極的な努力を加ふることを必要とする。そしてたとへ便乘的な加盟者であつても、遂に原理觀を轉倒し、人生觀を轉換して、維新達成に邁進するの餘儀なからしむるだけの正直力と迫力を發揮すべき責任を荷つて居る。顧みて、新體制中樞部の人々には、極めて深刻な內省を要すべき重大な諸點を內藏して

居ることを思はずには居られない。

私は此處で、林銑十郎大將を思ひ起すのである。即ち大將は嘗て總理大臣たる立場から祭政一致を叫んだ。然るに代議士諸君は勿論、革新陣營以外の一般者にも、これに對して充分なる理解を與へるものが尠かつた。けれども大將は敢然として持論たる『天業翼賛の主旨に伴ふ議會制度の實現』を望んで議會を解散した。ために大將は、當時恰も代議士諸君の怨府の的の如き觀があつた。然るに今は近衞公を中心とする大政翼賛の大旗幟下に新體制運動が展開されて居る。林大將の唱へる祭政一致論、若くは　天皇歸一論は、要するに此處に唱へて居る神意の地上顯現に對する萬民の奉答翼賛であり、神人合一の歸一論であつて、理念信條は極めて透徹して居る。

新體制運動の翼賛議會主義は、時代命令的な威力を發揮して巨大な殘骸的存在たりし既成政黨をして遂に解散せしむるまでに發展し、今や政黨人は舊觀念を捨てゝ欣然新運動に參加するに至つて居る。然るにこの翼賛議會主義は、既に林大將の意

圖する議會解散當時の主義であつて、明かに新體制運動の先鞭をなすものである。萬民翼賛と言ふ偉大なる大乘運動であればあるほど、古き常識情識を一擲し、大將の卓出する歸一觀、徹底せる滅私力を打つて一丸とする一大綜合運動の姿を見るのが極めて自然ではなかつたらうか。

況んや日本死活の問題たる高度國防の完遂にせよ、外交の世紀的轉換にせよ、大將の如き眞正直な滅私思想、徹底せる報國信條でなければこの非常時局乘り切りの困難は再言を要しない。故に私は、此空前なる國難に處して林大將の敢然蹶起を要望せざるを得ないのである。

（六）　秋霜なる滅私力

大政翼賛運動の中樞を組成する人々は、少數者を除けば、多く街頭に於ける實踐の苦慘を持つて居ない。それは最も明かに、中樞の人々が、內省心を敏鋭に動かせねばならぬかを物語るものである。

維新運動が、遠因近因の歴史的經緯を辿つて必然的に盛り上つて來た理由には勿論幾多ある。けれども其第一は、官僚を中心とする全支配機構が各々誤れる優越的特權感の中に安住し、利己的な無難主義に立籠り、眞實の聲に耳を覆ひ、眞實の人の動きに眼を避くる結果遂に沈澱化したからである。然しこのことは、烈々たる街頭の實踐人から見れば、恰も鏡に見る如くに目に寫ることであつても、所謂優越的特權感に安住する人々には餘程の尖鋭な良心が動かぬ限りそれを意識し得ない。此處にこの非常時に當面しても尙維新運動が容易に本道に進まざる至難性が潜むのである。

日本は今、外交換轉の重大期にある。最近の情報によると、米國が、フイリッピン島民の團結を促して全南洋土人に呼びかけ、汎馬來民族同盟を結ばせ、『日本の侵略に備へよ』の反日本運動を起さすために大枚の資金を輸送したとの話がある。勿論デマであれば誠に幸ひだが、若しこれが事實だとすれば、日本は明かに米國に先手を打たれたものである。亞細亞の南半分を占むる數億の同族民族に對して共榮

圏を宣言せる日本として、そこには必ず米國の先手を待たざる幾多の方略があるに相違ない。外交は決して、表玄關から聲明書を讀み上ぐることのみではない。尖鋭なる滅私力、秋霜なる盡忠力が躍動してさへ居れば、如何なる部門に向つて如何なる創造も、如何なる轉換をも斷じて不可能とはしないのである。

然るに尙、平凡無方面に惰し、後手から後手へのみ廻つて居るのは、矢張り無難主義的特權感に安住する舊體制だからであり、結局、新體制運動は生誕の必然性を見るに至つた所以でもある。

故に新體制の人々にとつて最も重大な點は、斷じて舊體制の如き平凡無方向に陷らざる高度の內省心を以て事に當ることである。其發足に當つて同志『誓』を行つた精神を何處までも突き通し、大局に向つて絕對に個人的な感情を挾まず、眞の聲を聽き、眞の人を容るるに飽まで忠誠且つ大膽に、秋霜なる滅私力を發揮されんことを希求して已まないのである。

408
275

昭和十五年九月二十八日　印刷
昭和十五年九月二十九日　發行

著作者　山田忠正

東京市麴町區內幸町幸ビル十號室
發行人　星野保永

東京市品川區東大崎三丁目二三九
印刷人　鈴木茂

東京市品川區東大崎三丁目二三九
印刷所　中屋三間印刷株式會社

東京市麴町區內幸町幸ビル十號室
發行所　皇民團本部
電話(57)五九四